



Be creative!



他者への尊厳を胸に 2024 年度入学式式辞より

新入生の皆さん、日本福祉大学附属高校へようこそ！

さて、皆さんに、三人の人を紹介しようと思います。一人目はタコの赤ちゃんの飼育日記をまとめた浜松に住む8歳の野中風玖（ふく）君。タコが好き。「タコになりたい。」と茶色の服を好んで身に着ける。昨年の春、タコの赤ちゃん三匹を自宅の水槽で飼育することにした。「マメ」「テナガ」「スカシ」と名づける。生シラスを与えたが、食べない。四日目、浜名湖で捕まえたスジエビを与えると食べてもらった。観察記録は「食べた！うれしかった。生きている。」夜にエサを食べることに気づき、父に夜中に起こしてもらった。23日目、マメが死んだ。エサとして与えたカニに襲われたようだ。翌日にはテナガも。死んだ稚ダコの黒目はまん丸だった。普段は細長いのに。苦しかっただろうに。風玖君はしばらく泣いた。この後、大切に育てたスカシは60日以上、生きた。彼のこの記録はやがてコンクールで賞に輝く。

二人目は東京大学の鈴木俊貴先生。四十歳。シジュウカラの鳴き声を中心に研究をしている。例えば「ジャージャー」蛇が来たぞ！「ヒヒヒヒ」鷹が来たぞ！と仲間に知らせる。「集まれ」という鳴き声もあり、実際に観察していると集まってくる。文法もある。鳥は単語を組み合わせて文を作る。先生はひたすら森を歩く。その姿はおよそ東大の先生には見えない。そして、ひたすら耳をすます。「僕たちがもっと原始的だった時は動物たちの言葉もわかっていたはず。人間はどこかで動物の言葉に耳を傾けなくなってしまい、自然との付き合い方を忘れてしまった。失ってしまった能力を取り戻して、自然のことをちゃんと理解し、観察することができたら、ぼくたちの生活はもっと豊かで平和になる。」



三人目は私の教え子のいさお君。いさお君は、国語のスピーチの時間に、昆虫博士として生きていた自分の小学校の時の思い出を豊かに語った。そのスピーチからは、彼が昆虫とともに楽しい日々を送ってきたことが伝わってきた。「はい！」スピーチ後、I 君が手を挙げた。「いさお君、質問。僕も小さい時はどんな虫だって触りたいと思っていただけで、最近は触りたいって思わないんだよね。どうしてだと思う。」私の隣に座ってそれを聞いていたともちゃんは「そんなこと、自分で考えろ。」と小さくつぶやいたが、この質問にいさお君は穏やかに答えた。「それはね、好奇心の問題だよ。」彼の回答は印象的だった。「僕もそうだけど、小さい時はよくわからないことが多いから、何だろうと思って触ってみる、つついてみる。そうして確かめてみる。僕たちの好奇心がその後押しをしているんだけど、大人になるとこの好奇心がなくなっていくよね。好奇心って大事なものなんだって思うよ。」小さな声で「いさお君・・・」と、ともちゃんが言ったのを今でも鮮明に覚えている。

この三人には夢中になれるものがある。そして、その夢中になれるものから、彼らは人生における哲学をも学んでいる。8歳の風玖君にはまだ自覚がないかもしれないが、彼もきっと学んでいるはずだ。人間だけが高度な生き物なのか、この三人はそれ以外の生き物にも、人間と同様の価値を見出し、尊厳の思いを抱いている。やがて、この思いは他者への尊厳の思いを育てる。I君の質問に丁寧に答えたいさお君の姿がそれをよく表している。「夢中になれるものがあるといいよね」と人がよく言う理由の一つがこれなの

かもしれないとは思っている。

「夢中になれるものができるといいね。」新入生の皆さんにも同様の言葉を送ります。さあ、どんな高校生活が皆さんを待っているのか。思春期のただなかを生きる君たちです。いろいろなことが起こるはず、苦しいことがいっぱいある。でも、それは自分がもがいているから、前進しようとしている証拠。どうぞ、困難を乗り越える知恵と力を身に付けて、君たちがたくましく成長すること、自分を大事にし、他者への尊厳を育てていってくれることを、私たちは願います。共に頑張りましょう。

★★新2年生入学式在校生発表に拍手★★4月8日始業式式辞より

短い期間での取り組みながら、2年生の皆さんはすばらしい発表を行いました。2019 年度を最後に、コロナ禍により途絶えていた入学式での在校生の合唱です。「私たちの学校の伝統を復活させよう」を合言葉に、まだ見ぬ新入生の思いを想像し、2年生の皆さんが取り組んでくれたことを本当にうれしく思います。

昨年度、コロナが第 5 類の疾患に統合され、生活が日常に戻るにつれ、改めて、この4年間の中で私たちが失ったものの大きさに気づかされました。これまで培ってきた文化を失うことの大きさと合わせて、それを取り戻そうとするには、維持してきたときの2倍も、3倍ものエネルギーを必要とするということをひしひしと感じ、日々を過ごしてきました。時には、そのエネルギーの大きさに負け、「なくなってもこうして過ごしてこられたじゃないか。これでいいのだ。無理をすることはない。」社会の変化を言い訳に、自分自身の妥協やなまけを許してきたように思います。

「それじゃあ、ダメなんだよ、先生！」2年生の生徒の皆さんにバシッと背中をたたいてもらったと思っています。皆さんの発表は、新入生へのエールだけでなく、私たち教員へのエールでもありました。何年後か先に、2024 年 4 月 5 日、あの日が私たちのリ・スタートの時だったねと振り返ることにきつとなる！

新学期ですね。「学ぶに価値ある文化を創造する学校」を目指して、全校の皆さんの英知を結集していきましょう。4 月 6 日の新聞でこんな言葉を見つけました。59 歳で東京大学に入学し、10 年後の今年、博士号を取得し、70歳で卒業をした鈴木知子さんのことが紹介されていた。40 歳以上年の離れた若者とともに研究をすることはさすがにしんどく、焦ることも多かった。でも鈴木さんは辞めたいとは思わなかった。その鈴木さんの言葉。「やる価値のあることは、たいていは少し辛いものだ。」 さあ、Re Start！です。

